



MEMORY



毒吐き道化

「この棚はここでいいか？」と、友達が訊ねてきた。

「ああ、そこでいいよ」

僕は友達の方を振り返り、頷いた。

新しい季節になり、僕は引っ越しをした。

少し街中から外れた場所にある、小さな古家だ。

僕は画家の為、静かな場所が欲しかった。そして家を探していたら、偶然この家を見つけた。一軒家のわりにはとても低価格で、静かな場所だったからここを借りたのだ。

「でも小さいとはいえ、良い家だよな？ それでこんなに安いなんて、何かあるんじゃないの？
幽霊が出るとかさあ」

友達は意地悪な笑みを浮かべて僕を見る。

「さあ、どうだろうね？ 不動産屋さんからは何も聞かなかったけど。でも、静かに絵が描ければ、幽霊が出て文句はないけどね」

僕は部屋の中を見回した。幽霊が出そうな雰囲気は感じない。むしろ、何か優しい空気に包まれている気がする。何となく落ち着くのだ。

「マジかよ？ 俺、少しぐらい騒がしくても幽霊が出ない方がいい」

何とも真面目な顔で友達は言う。よほど幽霊とか、そういう類のものが怖いらしい。少しだけ可笑しかった。

「――じゃあ、もう片付けはいいよ。あとは一人でやるから」

僕は友達に言った。

「そうか？ じゃあ俺、彼女とデートだから帰るわ」と、友達は笑みを浮かべ立ち上がる。――そして、僕の新しい生活が始まった。

もう外は暗くなっている。一通りの片付けを終えて、僕はキャンバスを取り出した。今度、若手画家の合同展覧会がある為、一枚絵を仕上げなければいけないのだ。

「うん……何を描こうかな」と、僕は声を出した。いつも、絵の題材を考えるのに時間を食ってしまう。しかも、絵を描くのにも時間がかかる。だから早く題材を決めて絵を仕上げなければならない。展覧会まで、あと一か月しかない。

「どうしようかな」

頭を悩ませて考えるが何も思い浮かばない。

「――そうだ」と、僕は一人呟く。

僕は立ち上がり、二階へと上がった。

二階には前の人忘れていった荷物があつた。

その荷物の中にはアルバムらしきものなどがあつた為、何か題材に出来るものがないか探そうと思ったのだ。

二階に上がり、扉を開けた。そして、電気を点ける。

「――え？」

僕は思わず声を上げた。部屋には、一人の女性がいた。長い黒髪の、清楚な感じの女性。整った顔立ちの女性だった。

怖さよりは、不思議さの方が勝った。誰かが家の中に入って来た音を聞いた覚えもなかったし、最初から誰かが居たとは思えない。それならば何故、こんなところに見知らぬ女性がいるのか。僕は声をかけた。

「あの……」と、言う声は女性の耳には届いていないようだった。

それ以前に女性は僕のことなど、まるで見えていないかのようだ。女性はベッドに腰をかけて、静かに読書をしていた。

どうしようか、と僕はその姿を見つめた。すると、女性は本にしおりを挟み立ち上がる。そして、僕の方へ向かってきたのだ。

さすがに驚いた。女性は僕の目の前まで来た。

――そして、僕を通り過ぎた。僕を避けて通り過ぎたのではない。

僕の体を通り抜けていったのだ。僕は目を見開き、急いで振り返った。その人は何事もなかったかのように、階段を下りて行った。

「あ、待って……」と、僕は呟き女性を追いかけて階段を下りた。

女性は僕の存在に気付かない。

――幽霊なのだろうか？ と、思ったのだが、何となく違う気がした。何故かはわからないが、そんな気がしたのだ。

――そして、それから僕と彼女の生活が始まった。

正確に言うと、彼女は僕の存在など知らないのだが、一応二人の生活ということになるのだろう。

彼女は普通に僕の目の前に現れる。そして、数日を共に過ごして気がついた。やはり、彼女は幽霊ではないと。しかし、現実存在しているわけでもない。

僕が考えたのは、この光景は前の住人が住んでいた時の、この家の記憶なのではないか、ということだ。だから、彼女は幽霊ではなく、ただのメモリー。この家が覚えている彼女を、再び映し出している――そう考えた。その彼女が実際に今、生きているのか死んでいるのかはわからないのだが。

絵を描くため、僕はほとんど家にこもっていた。そして、彼女の姿を見る。

すると、彼女は普通に台所で料理をしたり、外出をしたりする。さすがに幽霊にしてはおかしい気がする。一切、僕の行動には干渉しないのだ。だから、きっと過去の光景を再生しているようなものなのだと思う。

そう考えると急に申し訳なくなった。僕は彼女の日常を覗いてしまっているということなのだ。僕はいつも彼女の姿を見て、行動するようになっていた。

彼女がお風呂に入っている時は、風呂場には近づかない。トイレに入った時も、トイレには――

切近づかなかった。それが、彼女の日常を覗きみている僕の最低限のマナーなのだと思う。

そしてその家に住んで一週間。ようやく僕は彼女の名前を知った。彼女はリビングのテーブルでパソコンを使っていた。どうやら大学生らしく、レポートを書いているようだ。それを見ても、名前を打ち込んでいた。

――松島恵理。

それが彼女の名前だった。僕は何となく、彼女の名前を知れて嬉しくなった。

そして彼女との生活は続く。ある日、彼女は窓の前に座っていた。どうやら日向ぼっこをしているらしい。

その光景が、何とも言えず美しく感じた。僕はスケッチブックを開き、急いでクロッキーを始めた。彼女の姿を素早く描いていく。

「――これだ」

僕は思わず呟いた。ここ数日、全然絵の題材が決まらなかったのだが、ようやく描きたいものが見つかった。

彼女の日向ぼっこをしている姿を絵にしようと思ったのだ。たぶん、目の前の彼女は実際に存在している人だと思うから、本人に許可が必要なのだろうかと、思ったりした。しかし、どこの誰かもわからないし、目の前の彼女に許可を取ることも出来ない。そのため一瞬悩んだが、やはり彼女の姿を描くことにした。

今、彼女の姿以外に題材が見つかる気がしなかった。それに、単純に描いてみたいと思ったのだ。何とも自然で美しい、彼女の姿を描いてみたいと思った。そして、僕はキャンバスに向かった。今描いたばかりのクロッキーを参考に、キャンバスに下絵を描いた。

そして、僕は黙々と筆を動かした。

油絵具特有の匂いが部屋に漂う。僕はこの匂いが好きだった。この匂いを嗅いでいると、絵を描くやる気が出るのだ。

黙々と絵を描く僕の横で、彼女は日常生活を送っていた。読書をしたり、料理をしたり、居眠りをしたり――

もしかしたら、僕はいつの間にか彼女に惹かれていたのかもしれない。何となく胸に浮かぶ想いは、甘酸っぱい何かに似ている気がした。

そして、一か月をかけて絵は完成に近づいて行く。

僕の生活は前に比べて楽しいものだったと思う。展覧会の為の絵を描いている以外は、彼女の姿をクロッキーしたりした。

もっと、彼女の姿を描きたいと思ったのだ。

そして、いつか彼女の姿が消えてしまうのではないかと不安に思った。だから、僕は彼女の姿をクロッキーした。色んな姿を描いていった。いつか彼女の日常が見えなくなっても、描き続けていけるように。

この感情は、桃色に似ている気がする。情熱的な赤ではない。ただ、仄かに浮かぶ憧れ、なの

だろうか。幼いころの恋心みたいなものなのかもしれない。

そして、展覧会の五日前に、ようやく絵を描き終えた。

僕はキャンバスの絵具が乾くと、すぐに会場へと持っていき、セッティングをした。

今まで描いてきた中で一番納得出来る作品になったと思う。他の画家仲間からも、今までで一番称賛を浴びた気がする。僕は得意げな気持ちのまま、家へと帰った。「ただいま」と、僕は言う。前はそんなこと言わなかったのに、今では彼女に対して、「ただいま」と言っている。その言葉が彼女に届くことはないとわかっているのだけれど。

しかし、その日は家の中の雰囲気違った。――感じないのだ。彼女の生活感を感じないのだ。

どうやら恐れていたことが、訪れてしまったらしい。

「恵理さん？」

僕は思わず呟いた。急いで家の中に入り、色んな部屋を見て回る。

――もちろん、彼女の姿を探して。

全ての部屋を見たが、彼女の姿はなかった。僕は無性に悲しくなった。たったの一か月の共同生活だったのに、僕の中で彼女は大きいものになっていたのだ。

僕に微笑みかけることのない彼女に、一方通行の恋をしていた。この気持ちをぶつける場所はなく、いつも彼女がくつろいでいたリビングへ入った。普段は彼女が日向ぼっこをしている場所に、今日は僕が座り込む。

スケッチブックを開き、それを眺めた。厚いスケッチブックいっぱい、彼女の姿が描かれていた。

そっと、僕は紙の中の彼女を撫でる。鼻の奥が痛かった。たぶん、必死に涙をこらえているせいだろう。

僕は頭を振る。本当なら最初からなかったものなのだ。だから、諦めろと――自分に投げかける。

題材の思いつかなかった僕に降った奇跡だったのだ、と。彼女との生活は、僕に対する神様からのご褒美だったのだ。だから、だから――こんなに胸を締め付けるな、と。

僕は静かに、そして強く目を瞑った。

もう二度と映ることのないであろう光景を思い浮かべながら。いつの間にか頬に涙が伝っていた――

そして僕はまだこの家に暮らしている。彼女の姿が見えなくなった時は、引っ越そうかとも思った。しかし、彼女との接点はこの場所しかないのだ。

もし今引っ越してしまえば、本当にただの幻だったとしか思えなくなるだろう。しかし、これは本当に目の前にあったのだ。忘れなくなかった。

彼女の優しい微笑みを。だから僕はまだ、この家に住んでいる。

僕はいつの間にか、窓の前で日向ぼっこをしていることが毎日の習慣になっていた。日向ぼっこをしながら、目の前の庭を眺める。

――すると、誰かが敷地の中に入ってきている。

僕は思わず目をこらした。

誰だろう、と目をこらす。ここは街中から外れているから、そうそう人は通りかからない。友達が出来たのかと思ったが、連絡もないから違うだろう。

そして、僕は思わず目を見開いた。

「――恵理さん？」

何とも言えない気持ちになって、僕は呟く。

確かに、庭に居るのは恵理さんなのだ。これは、またこの家が過去の記憶を再生しているのだろうか、と思った。しかし、どうやら目の前にいる彼女には現実感がある。

「――あの、すみません」

彼女は僕の姿を見つめながら、申し訳なさそうに声をかけてくる。今まで、僕の姿を見つめることがなかった彼女が、僕に視線をむけているのだ。

僕は一瞬戸惑いながらも、すぐさま窓を開ける。

「どうか、しましたか？」と、この動揺を悟られないように言葉を返す。

「すみません。私、前ここに住んでいた者なんですけど……ちょっと忘れ物をしたみたいなんです」

彼女は申し訳なさそうに頭を下げる。

「ああ、アルバムですか？」

「はい！ あ、まだありますか？」と、彼女は首をかしげた。

「大丈夫ですよ、捨ててませんから。ちょっと待ってて下さいね」

僕は急いで二階へ駆け上がり、アルバムを手にした。

「ありがとうございます」と、彼女は微笑んだ。あの光景の中と一緒の微笑みだった。そして、「もしかして、画家さんですか？」と、彼女は言う。彼女は、僕の服についての油絵具を見つめている。

僕は胸を弾ませながら、「はい」と、返す。

「私、絵とか見るの好きなんですよね」

何とも眩しい笑顔で、彼女は言った。

「――あの」

僕は勇気を振り絞って、彼女に話しかける。

それは、幻なんかではなく現実の彼女に。

きっと、これは素晴らしい毎日の始まりに違いないと、僕は胸を弾ませるのであった――

END.